

無義為義

——親鸞晩年の課題と二種回向——

中山量純

問題の所在

親鸞は晩年に実に多くの著作を残している。その中でも、本論では『浄土三経往生文類』に注目したい。

『大経』の仏者である親鸞が、『教行信証』において自身の立った仏道を、「願生浄土」「大般涅槃道」として明らかにしていることは、これまでの研究において、幾度も確認されてきたことである。そのような親鸞の仏道観は、『教行信証』の後も、その生涯に渡って多くの著作により確かめがなされている。しかし、その仏道観の表現が、晩年において変化してきているように見受けられる。それが端的に表れているものが『浄土三経往生文類』である。

『浄土三経往生文類』は、その題号の通り、浄土三部

経と称される『大経』『観経』『阿弥陀経』に教えられる「往生」について説かれたものである。その構造を一見すれば、三経それぞれの往生が、本願文を中心にして解説されているように見受けられる。往生は浄土教の核心となる思想である。それは親鸞の師である法然も、『選択本願念仏集』の標挙において、

南無阿弥陀仏 往生の業は念仏を本と為す

(『真聖全』一・九二九頁)

と説き、さらには王本願として掲げる第十八願を「念仏往生の願」と名づけるように、『選択本願念仏集』に説かれる専修念仏の仏道が、往生浄土を証とすることからも伺えよう。当然、法然と同一の信心を得た親鸞も、『浄土三経往生文類』の中で第十八願を引用する際に、「念仏往生の願」という法然に教えられた願名を用いて

おり、この念仏往生の思想が受け継がれている。

しかし『教行信証』では、第十八願を「至心信楽の願」と名づけ、「信巻」の標拳とする。さらに、

涅槃の真因は唯信心を以てす。

〔定親全〕一・一一五頁

という龍樹、曇鸞、法然と伝承される教えを旗印とし、本願成就の一心を内観する。そして、その信心が如来の欲生心と相応した願生心であるからこそ、必ず涅槃を開くことを、三心一心の問答を軸に明らかにされる。つまり、先ほど述べた通り、『教行信証』では「願生浄土」「大般涅槃道」として、仏道観が述べられているのである。

このように、『教行信証』と『浄土三経往生文類』では「願生」と「往生」として、その仏道観の表現が変化しているように見受けられる。勿論、『教行信証』においても往生という思想がないわけではなく、また『浄土三経往生文類』でも願生を抜きにして著されるものではない。

しかし、『教行信証』においては、「行巻」で法然の『選択本願念仏集』を引用した後に、

明らかに知りぬ、是れ凡聖自力の行にあらず。故に

不回向の行と名づくるなり。大小の聖人・重軽の悪人、皆同じく齊しく選択大宝海に帰して、念仏成仏すべし。

是を以て『論註』に曰く、彼の安楽国土は阿弥陀如来の正覚浄華の化生する所にあらざることなし。同一に念仏して別の道なきが故にとのたまえり。已上しかれば、真実の行信を獲れば、心に歓喜多きが故に、是れを歓喜地と名づく。是れを初果に喩うることは、初果の聖者、尚睡眠し懶墮なれども、二十九有に至らず。何に況や、十方群生海、斯の行信に帰命すれば撰取して捨てたまわず。故に阿弥陀仏と名づけたてまつると。是れを他力と曰う。是を以て龍樹大士は「即時入必定」と曰えり。曇鸞大師は「入正定聚之教」と云えり。仰いで斯を憑むべし。専ら斯を行すべきなり。〔定親全〕一・六七〜六八頁

と述べられている。親鸞は、念仏を往生の業とする仏道の内に秘められた、「仏の本願に依る」という他力の信心こそ、法然の念仏往生の仏道の核心であることを見抜き、「真実の行信」として言い当てる。さらに、その行信に開かれる「同一に念仏して別の道なし」という地平を、龍樹・曇鸞の教えから、現生正定聚という思想的極

致として確かめていく。親鸞は、ここに大乘仏教と浄土教の交差を見て、法然の念仏往生の仏道こそ大乘の至極であり、浄土教の本義であることを明らかにするのである。このように『教行信証』では、法然の念仏往生の仏道を、積極的に願生浄土として確かめ直しをしている。

それでは、何故親鸞は、晩年において『浄土三経往生文類』を著し、態々「往生」という問題を取り上げねばならなかったのか。そこで本論では、その問題を明らかにするために、当時の親鸞の課題と、『浄土三経往生文類』に託された親鸞の命題を確かめることで、『浄土三経往生文類』撰述の意義について考えたい。

第一章 善鸞事件を背景とした観念的

信心を歎異する

『浄土三経往生文類』には略本と広本がある。まずは、この二本の撰述時期について確認したい。

二本の奥書を見ると、略本は建長七（一二五五）年の親鸞八十三歳に著されたものであり、また広本は康元二（一二五七）年の八十五歳である。この二本の年代から、常々『浄土三経往生文類』の背景と目される歴史的事実が、善鸞の義絶である。

又、慈信房のほうもんのよう、みようもくをだにもきかず、しらぬことを、慈信一人に、よる親鸞がおしえたるなりと、人に慈信房もうされてそうろうとて、これにも常陸・下野の人々は、みなしらんが、そらごとをもうしたるよしをもうしあわれてそうらえば、今は父子のぎはあるべからずそうろう。

（『定親全』三・書簡篇・四〇～四一頁）

この書簡は、建長八（一二五六）年五月二十九日に、親鸞が善鸞宛に筆を取ったものである。この書簡から、善鸞の義絶は親鸞八十四歳の出来事と推察される。この年は、親鸞が『浄土三経往生文類』の略本を書いた翌年であり、さらに翌年には広本が書かれている。このような年代の関わりから、善鸞の義絶という歴史的事実は、『浄土三経往生文類』撰述の背景として注目されるのであろう。

さらに、親鸞は別の書簡^③で善鸞の問題を、「往生極楽の大事」について、「ひたち・しもづけの念仏者をまどわし、おやにそらごとをいいつけたること」、また「第十八の願をば、しほめるはなにたとえて、人ごとに、みなすてまいらせたりときこゆること」と、具体的に指摘する。親鸞は、善鸞事件における問題の所在を五逆と諍

法として明確にし、人間の根源的課題として普遍化する。ここには親鸞の聞法を通した、明確な歎異の精神が伺われる。

だからこそ、この史実は、教団内の歴史的事件や個人的な家庭問題といった、親鸞の個人的な体験に止まらない。先の義絶状と同日に、性信に宛てて善鸞義絶の旨を知らせる書簡^④が宛てられている。その中で親鸞は、

さては慈信が法文の様ゆえに、常陸・下野の人々、念仏もうさせたまいそうろうことの、としごろうけたまわりたる様には、みなかわりあうておわしますときこえそうろう。かえすくこ、ろうくあさましくおほへ候。としごろ往生を一定とおおせられそうろう人々、慈信とおなじ様に、そらごとをみなそうらいけるを、としごろふかくたのみまいらせてそうらいけること、かえすくあさましようそうろう。そのゆえは、往生の信心とまうすことは、一念もうたがふことのそうらわぬをこそ、往生一定とおもいてそうらえ。光明寺の和尚の、信の様をおしえさせたまいそうろうには、まことの信をさだめられてのちには、弥陀のごとくの仏、釈迦のごとくの仏、そらにみちく、釈迦のおしえ、弥陀の本願はひが

ごとなりとおおせらるとも、一念もうたがひあるべからずとこそうけたまわりてそうらえば、その様をこそ、としごろもうしてそうろうに、慈信ほどのもの、もうすことに、常陸・下野の念仏者の、みな御こ、ろどものうかれて、はてはさしもたしかなる証文を、ちからをつくしてかずあまたかきてまいらせてそうらえば、それをみなすてあうておわしませうろうときこえそうらえば、ともかくももうすにおよばずそうろう。

〔定親全〕三・書簡篇・一六七―一六九頁

と述べる。この書簡に見られるように、親鸞の歎異は善鸞個人を問題視するものではない。「常陸・下野の人々」「常陸・下野の念仏者」とあるように、善鸞の下に集う関東の門弟達にまで、親鸞は目を向けている。そして、「往生の信心とまうすことは、一念もうたがうこと、そのそうらわぬをこそ、往生一定とおもいてそうらえ」と、門弟達の信心を問題にする。

さらに、その信心の問題は、善鸞の事件に特筆するものではない。親鸞の著作の多くは晩年に集中しているが、その時期に、親鸞が特に読んでいたものが聖覚の『唯信鈔』である。それは、親鸞が幾度も書写し、また御消息

や『歎異抄』においてもその名が挙げられることから、自ら何度も拝読し、また門弟にも積極的に勧めていたと考えられる。『唯信鈔』は法然の『選択本願念仏集』に顕される念仏往生の仏道を継承したものである^⑤。さらに、むなしくみを卑下して、こゝろを怯弱にして、仏智不思議をうたがうことなかれ。(中略) 仏力をうたがひ、願力をたのまざる人は、菩提のきしにのぼることかたし。たゞ信心のてをのべて、誓願のつなをとるべし。仏力無窮なり、罪障深重のみをおもしとせず。仏智無辺なり、散乱放逸のものをもすつることなし。信心を要とす、そのほかをばかえりみざるなり。信心決定しぬれば、三心おのづからそなわる。本願を信ずることまことなれば、虚仮のこゝろなし。浄土まつことうたがひなければ、回向のおもいあり。このゆえに、三心ことなるにたれども、みな信心にそなわれるなり。

〔定親全〕六・写伝篇二・五八―六〇頁

と、念仏往生の核となる「かの仏の本願に順ずるがゆえに」という本願も、「信心を要とす」と確かめている。

『摧邪輪』に代表されるような、当時の『選択本願念仏集』に対する批判が信心の問題であることを、正確に見

抜いた上での書であると言えよう。また、その他方の信心を勧める根拠として、「むなしくみを卑下して、こゝろを怯弱にして、仏智不思議をうたがふことなかれ」と述べ、「仏力をうたがひ、願力をたのまざる人は、菩提のきしにのべることかたし」と述べて、仏智疑惑という我々の自力の心を誡めている。そこで、聖覚が「みを卑下して、こゝろを怯弱にして」と押さえるように、その誡めは宿業存在としてある我が身の事実の徹底である。これが『観経』三心の深心についての釈文として、二種深信を踏まえた上で述べられることから、その徹底が信心の自覚内容であると了解できる。つまり『唯信鈔』は、実在としての衆生を問うような信心を明らかにしていると言えよう。

その『唯信鈔』を、親鸞が何度も拝読し門弟に勧めていたことを逆説的に考えれば、親鸞のまわりで信心を観念的に捉えるような風潮があったと考えられる。それは、親鸞の次の書簡にも見受けられる。

まづ一念にて往生の業因はたれりともうしそろうろは、まことにさるべきことにてそろうろべし。さればとて一念のほか念仏をもうすまじきことにはそらわらず。そのようは『唯信鈔』にくわしくそろう

う。よくく御覽せうろうべし。(中略) また有念・無念ともうすことは、他力の法文にはあらぬことにてせうろう。聖道門にもうすことにてせうろうなり。みな自力聖道の法文なり。阿弥陀如来の選択本願は、有念の義にもあらず、無念の義にもあらずともうしせうろうなり。(中略) 常陸国中の念仏者のなかに有念・無念の念仏沙汰のきこえせうろうは、ひがごとくせうろうと、もうしせうらいき。(中略) よくよく『唯信鈔』を御覽せうろうべし。(定親全) 三・書簡篇・一三〇―一三四頁)

この書簡では、親鸞が一念多念と有念無念という念仏に関する問題について答えているが、そのいずれにおいても『唯信鈔』を御覽せうろうべし」と、『唯信鈔』を勧める。特に有念無念の問題については全面的に否定している。それは、有念無念の問題が起こることが信心を観念的に捉えている証拠であり、選択本願の念仏にあつては「如来よりたまわりたる信心」の他にないのである。だからこそ、「常陸国中の念仏者のなかに有念・無念の念仏沙汰のきこえせうろうは、ひがごとくせうろうと、もうしせうらいき」と、信心を観念的に捉える関東の門弟達を具体的に歎異する。また、

奥群のひとつの、慈信坊にすかされて、信心みなうかれあうておわしましせうろうなること、かえすくあわれにかなしうおぼえせうろう。これもひとつをすかしようしたるよきにきこえせうろうこと、かえすくあさましくおぼえせうろう。それも日ごろひとつの信のさだまらずせうらいけることあらわれてきこえせうろう、かえすく不便にせうらいけり。慈信坊がもうすことによりて、ひとつの日ごろの信のたちろきあうておわしましせうろうも、詮ずるところは、ひとつの信心のまことならぬこととあらわれてせうろう、よきことにてせうろう。

〔定親全〕三・書簡篇・一四九―一五〇頁〕と、親鸞は善鸞のもとに集う人々の問題について、「信のさだまらずせうらいけること」「日ごろの信のたちろきあう」「信心のまことならぬこと」と、観念的な信心であるがゆえに不確かであるに批判している。このように親鸞は、観念的な信心によって確かめられる仏道が、法然より継承した念仏往生の仏道と根底から質を異にするものであることを問題視し、善鸞という人物が具体的に現れる前から警鐘を鳴らしていた。しかし、人間の業縁が善鸞を生み、関東の混乱を引き起こしてい

く。親鸞はその責任として、善鸞を義絶することとなる。しかし、それは社会的な責任を果たしたに過ぎず、すぐに觀念的な信心に転落する人間の問題は問われていない。そこで、その思想的責任として、多くの著作を通じて、法然に教えられた実存性を問うような仏教の回復を確かめていると考えられる。

第二章 実存に立って如来の恩徳を仰ぐ

親鸞の著作の中でも『浄土三経往生文類』は、「文類」という方法が採用されている。親鸞の著述は多くあるが、「文類」という著述方法が取られるのは、主著である『顕浄土真実教行証文類』と、その略本とも取れる『浄土文類聚鈔』、そして『浄土三経往生文類』である。また『如来二種回向文』も、上宮寺蔵の写本によれば『往相回向還相回向文類』と題されている。この『如来二種回向文』は、その撰述時期や構造から、親鸞が『浄土三経往生文類』の略本では徹底されなかつた問題として『如来二種回向文』で明確にし、それらを合わせて広本として大経往生を明らかにしたと考えられる。

このように見ると、親鸞の著作の中で「文類」という方法が取られているのは、大きく分ければ、『教行信

証』と『浄土三経往生文類』と言えよう。この二つの著作に共通する思索とは何か。それは二種回向の推求である。『浄土三経往生文類』では、大経往生を説く上で、まず「如来の往相回向」について「真実の行業」、「真実信心」、「真実証果」を明らかにする。そして、「二、還相回向というは」と、『浄土論』の出第五門と第二十二願をもって、還相回向を説き、

如来の二種の回向によりて、真実の信樂をうる人は、かならず正定聚のくりに住するがゆえに、他力ともうすなり。

しかれば、『無量寿経優婆提舍願生偈』曰。

「云何回向いかにがえこうしたまはるすして不捨すて一切苦惱衆生、心常作願こころを為な二首一得ふたごころを成な就す大悲心おほいしむこころ一故ひとよ」

これは『大無量寿経』の宗教としたまえり。これを難思議往生ともうすなり。

〔定親全〕三・和文篇・二八頁

と述べられる。このように、親鸞は二種回向をもって大経往生を明らかにしている。また、『教行信証』は、

謹んで浄土真宗を案ずるに二種の回向あり。一には往相、二には還相なり。往相の回向に就いて真実の教行信証あり。

〔定親全〕一・九頁

と始まり、浄土真宗として表明される仏道の全体が二種回向に貫かれている。『教行信証』にある通り、二種回向を抜きにして浄土真宗はないため、二つの著作以外でも二種回向の思索がなされていないわけではない。しかし、親鸞が態々「一には往相、二には還相」と立てて、その全体を二種回向の推求に費やしているものは、『教行信証』と『浄土三経往生文類』であろう。それでは、この二種回向の推求において「文類」という方法が取られるのは何故か。

「文類」について確かめるとき、しばしば『楽邦文類』の影響が先学の研究で挙げられる。そこで指摘されるように、「文類」とは、科を設けて分類し、一文一文が独立したものとして集成されたものである。『教行信証』の構造を一見すれば、「教巻」以外の各巻^⑧では、まず所依の『仏説無量寿経』によって本願文と成就文が挙げられ、その意味を正確に捉えるために異訳の經典が引用される。それに続いて論書や釈文の引用がなされているが、それらは經典を解説するためにあるのではなく、本願の仏道に立った者の表明として、単独の意味をもって引用されている。そのような構造的 성격が「文類」の特徴として確かめられている。

また、親鸞は『浄土文類聚鈔』の中で、「文類」という方法を取る理由を次のように述べている。

ここに片州の愚禿、印度西蕃の論説に帰し、華漢地域の師釈を仰ぎて、真宗教行証を敬信す。特に知りぬ、仏恩窮尽し叵ければ、明らかに浄土の文類聚を用いるなり。
(『定親全』二・漢文篇・一三二頁)

親鸞は、「片州の愚禿」という凡夫として、釈尊の教説や七祖の論書や釈文を仰ぎ、「教行証」という実践的な仏道を「敬信」する。この「敬信」は、仏道が我が身に成就したという己証に他ならない。そして、その己証を實現する二種回向の恩徳は「窮尽し叵」いために「文類」という方法が用いられる。「証巻」の結釈において、

しかれば、大聖の真言、誠に知りぬ。大涅槃を証することは願力の回向に籍りてなり。還相の利益は利他の正意を顕すなり。是を以て論主は廣大無碍の一心を宣布して、普く雑染堪忍の群萌を開化す。宗師は大悲往還の回向を顕示して、慇懃に他利利他の深義を弘宣したまえり。仰いで奉持すべし、特に頂戴すべしと。
(『定親全』一・二三三頁)

と、親鸞は曇鸞の「他利利他の深義」をもって、二種回

向が如来の回向であると確かめ、その如来の恩徳を「仰いで奉持すべし、特に頂戴すべし」と徹底する。

このように、「文類」という方法の特徴からも、親鸞の己証の表明からも、親鸞が仏恩報謝の念をもって、二種回向を推求していると言えよう。それは「仏恩窮尽し回」い凡夫としての我が身があるからである。『大経』において、

如来の智慧海は、深広にして涯底なし、二乗の測る所にあらず、唯仏のみ独り明らかに了りたまえり。

〔真聖全一・二七頁〕

と説かれているように、凡夫が如来の恩徳を追究し、知り尽くすことなどできない。だからこそ「文類」として、「印度西蕃の論説に帰し、華漢日域の師釈を仰」ぎ、凡夫として二種回向を推求するのである。

第三章 仏道の実現力を問う

信心の観念化という思想的課題の中で、親鸞が二種回向を推求する目的とは何か。『教行信証』の「信巻」三心一心の問答では、親鸞が二種回向の最も根源的な意義を、欲生釈として確かめている。

欲生釈には、親鸞の二種回向の典拠となる『浄土論

註』の回向門釈が引用される^④。親鸞は独自の訓点を付することによって、回向の主体が如来であることを明確にする。そして、続けて『浄土論註』の浄入願心と『浄土論』の出第五門が引用される。

又云わく、浄入願心とは、『論』に曰く、又向に觀察莊嚴仏土功德成就、莊嚴仏功德成就、莊嚴菩薩功德成就を説きつ。此の三種の成就は願心の莊嚴したまえるなりと知るべしといえりと。応知は、此の三種の莊嚴成就は、本四十八願等の清浄の願心の莊嚴したまう所なるに由つて、因浄なるが故に果浄なり、因なくして他の因あるにはあらざるなりと知るべしとなりと。已上

又『論』に曰く、出第五門は、大慈悲を以て一切苦悩の衆生を觀察して、応化の身を示して、生死の園、煩惱の林の中に回入して、神通に遊戯し教化地に至る。本願力の回向を以ての故に。是を出第五門と名づくとのたまえりと。已上

〔定親全一・二二九―二三〇頁〕

ここで注目すべきは、親鸞が引用する際に「云わく」と述べることである。親鸞は、經典の引用は「言」、論書の引用は「曰」、釈文は「云」と、基本的に使い分け

をする。但し、七祖の中で曇鸞の『浄土論註』はこれに該当しない。本来、釈文であるところを「曰」を用い、さらに『浄土論註』の引用でありながら『論』と称することから、親鸞は『浄土論註』を『浄土論』と一組にして、論書として位置づけているように見受けられる。しかし、親鸞はこの欲生釈の引用においては「云」の字を用いて釈文の扱いをする。これにはどのような意図があるのだろうか。

その意図を確認する上で、合わせて考えたいことが出第五門の「又『論』に曰く」である。この文は『浄土論』からの引用であるため、「曰」の字が用いられており、一見すれば、疑問を差し挟む余地はないであろう。

しかし、先の浄入願心に見られる「『論』に曰く」は、元々の『浄土論註』にはなく、親鸞が態々挿入したものである^⑩。従って、これまでは『浄土論註』の浄入願心と『浄土論』の出第五門からの引用として、単一的に捉えられてきた箇所であるが、親鸞の引用方法を総合的に考えたとき、あとの出第五門の「又『論』に曰く」という「又」は、前の「『論』に曰く」と並列的關係を構築するものであると考えられる。従って、後者の引用は確かに『浄土論』の出第五門であるが、ここではその意義を

確保しながらも、浄入願心の内容として確かめられているのではないだろうか。

そもそも浄入願心とは、浄土の二十九種莊嚴の成就が法蔵菩薩の願心を因とすることを説いたものである。

略説して一法句に入るが故にと。

上の国土の莊嚴十七句と、如来の莊嚴八句と、菩薩の莊嚴四句を広とす。入一法句を略とするなり。何の故にか広略相入を示現したまうとなれば、諸仏・菩薩に二種の法身まします。一は法性法身、二は方便法身なり。法性法身に由つて方便法身を生ず。方便法身に由つて法性法身を出だす。此の二の法身は異にして分かつべからず、一にして同ずべからず。是の故に広略相入して、統ずるに法の名を以てす。菩薩、若し広略相入を知らずば、則ち自利利他にあたわじ。

〔真聖全〕一・三三六（三三七頁）

ここで「広略相入」と抑えられるように、「世尊我一心帰命尽十方無碍光如来 願生安樂国」として自身の獲得した「我一心」は、その意味を尋ねれば、法蔵菩薩の本願に適った信心の発起である。如来が衆生の実相を見抜き、本願を誓い、浄土にまでなった。その因位法蔵菩薩の兆載永劫の修行が、自利利他を実現するのである。

自利利他とは衆生の現実問題である。善導の『往生礼讚』において、

又菩薩は已に生死を免れて、所作の善法回して仏果を求む、即ち是自利なり。衆生を教化して未来際を尽す、即ち是利他なり。然るに今の時の衆生、悉く煩惱の為に繫縛せられて、未だ悪道生死等の苦を免れず。縁に隨いて行を起して、一切の善根具に速に回して阿弥陀仏国に往生せんと願ぜん。彼の国に到り已りて、更に畏るる所なけん。上の如きの四修、自然任運にして自利・利他具足せざることなし。応に知るべし。(『真聖全』一・六五〇～六五一頁)

と述べられる文を、親鸞は「化身土巻」の中で、至誠心と回向発願心を挙げた後に引用する。ここで述べられるとおり、自利とは、「菩薩は已に生死を免れて、所作の善法回して仏果を求む」という一人ひとりの信仰主体の確立であり、利他は、「衆生を教化して未来際を尽す」という、その信仰をもって他と共に生きることである。我々は、煩惱に繫縛されるために、この現実問題を円満に実現することが容易ではない。だからこそ、我々を見抜く本願のたすけにあずかる他にないのである。

しかし、『浄土論註』は『浄土論』の註釈書であるた

め、菩薩道の仏道体系の中で説かれている。だから、五念門として表される自利利他も、一見すれば、段階的な菩薩行として了解できる。それは二種回向においても同様に、「回向に二種の相あり。一には往相、二には還相なり」と言われることが、回向を菩薩行として、往相から還相へと段階的に捉えられるのである。

その中で親鸞は、「謹んで浄土真宗を案ずるに二種の回向あり」と称し、行ではなくはたらきとして確かめ、さらに回向の主体が如来にあることを明確にすることで、浄土真宗として明らかにされる仏道は誓願一仏乗であることを表明する。それには、欲生釈で『浄土論註』の回向門を引用するだけでは、仏道における二種回向の意義を表すことができないのである。そこで、「又云わく」と回向門を注釈する意図をもって、浄入願心が引用される。しかも、『論』に曰く」と付すことで、往相回向と還相回向の内容を「広略相入」の意義をもつ浄入願心として確かめ、二種回向を分離せずに捉える。つまり、親鸞において二種回向を推求することは、法蔵菩薩の兆載永劫の修行の探求であり、衆生に自利利他を実現する能力を明かすことに他ならないのである。

この二種回向による実現力こそが、信心が観念的に捉

えられる中で問われていたのではないだろうか。『教行信証』の撰述においても、明恵の『摧邪輪』が具体的な事柄として指摘される。『摧邪輪』では「菩提心の撥去する過失」が異義として挙げられるが、明恵の姿勢は菩提心と念仏を並列的に検討し、菩提心こそ經典に則しているというものである。しかし、その批判的となる菩提心は観念的な信心であり、衆生に仏道が実現することを問題としない。そのような『摧邪輪』に代表されるような批判を背景として、『教行信証』が撰述されたことを考えれば、観念化した信心に対して二種回向を明らかにし、実存性が問われるような仏道を表明しようとした親鸞の意図があつたのではないだろうか。その意図は欲生積の文言に顕れている。

次に欲生と云うは、則ち是れ如来、諸有の群生を招喚したまうの勅命なり。即ち真実の信楽を以て欲生の体とするなり。誠に是れ、大小凡聖定散自力の回向にあらず。故に不回向と名づくるなり。然るに微塵界の有情、煩惱海に流転し、生死海に漂没して、真実の回向心なし、清浄の回向心なし。是の故に如来、一切苦悩の群生海を矜哀して、菩薩の行を行じたまうし時、三業の所修乃至一念一刹那も、回向心

を首として、大悲心を成就することを得たまえるが故に。利他真実の欲生心を以て諸有海に回施したまへり。欲生は即ち是れ回向心なり。斯れ則ち大悲心なるが故に、疑蓋雜わることなし。

（『定親全』一・二二七―二二八頁）

欲生積では、まず本願招喚の勅命と不回向について述べられる。これらは「行巻」の南無釈と七祖の結釈と重なる¹³。親鸞が本願招喚の勅命と不回向を挙げることは、「選択本願」と称される法然の念仏の意義を、この欲生に見ているのである。

そこで親鸞は、『浄土論』『浄土論註』の回向門の言葉を用いながら、「回向心を首として」と、「心」の一言を付している。元来、回向を行として捉えてきた中で、信心の問題として捉え直した親鸞の確かめが伺われる。そのことに加えて、「微塵界の有情、煩惱海に流転し、生死海に漂没して、真実の回向心なし、清浄の回向心なし」と言われるように、衆生が仏道を成就することができないことに即して、如来の回向心をもって仏道の実現が確かめられている。ここに親鸞の実存的な仏道の思索が了解できる。

そのような思索は、晩年の親鸞においても同様に見ら

れる。門弟の中で問題となる信心の觀念化は、その問題の正体も分からぬままに、関東において善鸞を生み出した。親鸞は書簡を通じて、その問題を繰り返し問うが、善鸞事件を契機として、二種回向の再構築に踏み切ったのであろう。そのときの旗印として掲げられたものが「無義為義」である。

親鸞は、晩年の著作や書簡の中で、「義なきを義とす」と幾度も繰り返す。『如来二種回向文』は、

他力には義なきをもて義とすと大師聖人はおおせごとありき。よくよくこの選択悲願をこゝろえたまうべし。

（『定親全』三・和文篇・二二〇頁）
と最後に抑えられ、さらに「義なきをもて義とす」こそが法然の教えであると述べる。法然が直接、「義なきを義とす」と表明しているものは確認できていないが、親鸞はこれを「選択悲願」といい、書簡では、

また他力ともうすことは、弥陀如来の御ちかいのなかに、選択撰取したまえる第十八の念仏往生の本願を信樂するを、他力ともうすなり。如来の御ちかひなれば、他力には義なきを義とすと、聖人のおおせごとにてありき。義ということは、はからうことばなり。行者のはからいは自力なれば義というなり。

他力の本願を信樂して往生必定なるゆえに、さらに義なしとなり。

（『定親全』三・書簡篇・六四頁）
と、「はからい」として確かめている。つまり、「義なきを義とす」という法然の教えは「不回向」であり、親鸞においては本願力回向を象徴しているのである。

このようにして親鸞は、晩年に二種回向を打ち出していく。そのとき、「無義為義」という法然の教えが旗印とされることに、法然への回帰という親鸞の意図が伺える。煩惱を断じ得ない我々が帰すべきものは、常に師の教化である。親鸞は、凡夫であるという實際問題に立つて仏道を確かめたいと言えよう。『歎異抄』の第二章において、

親鸞におきては、たゞ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかふりて信ずるほかに、別の子細なきなり。念仏は、まことに浄土にうまるゝ、たねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべらん。総じてもて存知せざるなり。

（『定親全』四・言行篇一・五頁）
という親鸞の表明が伝えられている。浄土真宗の仏道は、一切を本願に任せよという師の教化に遇ったことのみが真実であると、「いづれの行もおよびがたき身」¹⁶⁾をもつ

て確かめているのである。

問題の帰結

親鸞が法然への回帰を呼びかけるのは、偏に、第十八願が「しほめるはな」に譬えられ、そのことで右往左往するほどに、念仏往生の仏道が根底から見失われていたからである。その歎異の精神こそが、「無義為義」の旗印である。親鸞は単に善鸞や関東の門弟を批判しているのではない。宿業存在としての我が身の悲歎において、世界全体が本願に背いている事実が傷まれる。だからこそ、その歎異によって、浄土真宗を根底から貫く二種回向を明らかにするのである。

この歎異の精神によって、親鸞は晩年に多くの著作を残すが、その中心となるものが『浄土三経往生文類』であると考えられる。

大経往生というは、如来選択の本願、不可思議の願海、これを他力ともうすなり。これすなわち念仏往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり。現生に正定聚のくらしいに住して、かならず真実報土にいたる。これは阿弥陀如来の往相回向の真因なるがゆえに無上涅槃のさとりをひらく、これを『大経』

の宗教とす。このゆえに『大経』往生ともうす、また難思議往生ともうすなり。

〔定親全〕三・和文篇・二二頁

親鸞は大経往生の表明として、まず「如来選択の本願」と「不可思議の願海」をもって他力と言う。これは『浄土論註』の不虚作住持功德である。

「不虚作住持功德成就」は、盖し是れ阿弥陀如来の本願力なり。いま当に略して虚作の相の住持能わざるを示して、用て彼の不虚作住持の義を顕すべし。

（中略）言う所の不虚作住持は、本法藏菩薩の四十八願と、今日の阿弥陀如来の自在神力とに依るなり。願以て力を成ず、力以て願に就く。願徒然ならず、力虚設ならず、力願相符うて畢竟じて差わざるが故に成就と曰う。〔真聖全〕一・三三二頁

「願生偈」において「観仏本願力」と詠われたことを、「本法藏菩薩の四十八願」の因力と「今日の阿弥陀如来の自在神力」の果力として明らかにし、仏道成就の根本的原理を、因果力をもって確かめている。親鸞は、その根本原理を「如来選択の本願」と「不可思議の願海」として表明して、二種回向を立てて推求する。同時期に撰述された他の著述と比較すれば、『浄土三経往生文類』

は二種回向に特化した体裁を持つ。このことから、浄土真宗を再興するための歎異の精神こそが、『浄土三経往生文類』撰述の意義と考えられる。

凡例

- 一、旧漢字、旧仮名遣いは、原則、現行のものに改めた。
- 一、人名への敬称は省略した。
- 一、原漢文のものは原則として、『真宗聖典』（東本願寺出版部）等を参考に書き下しを行い、読み易さを考慮して適宜整文を行った。左訓は省略した。
- 一、主な引用文の出典は、以下のように略記した。

『定本親鸞聖人全集』↓『定親全』、『真宗聖教全書』↓『真聖全』

註

- ① 龍樹は『大智度論』において、「問うて曰く、諸の仏經は何を以ての故に、初に如是の語を称うるや。答えて曰く、仏法の大海は信を能入と為し、智を能度と為す。」（『大正新脩大藏經』二五・六二―六三頁）と説き、曇鸞は『浄土論註』において、「經の始に如是と称す、信を彰して能入とす。」（『真聖全』一・三四八頁）と説く。さらに法然は『選択本願念仏集』にて、「涅槃の域には信を以て能入とす。」（『真聖全』一・九六七頁）と説いており、「信を以て能入とす」ということが大乘仏教に伝承されている。
- ② 専修寺藏の顕智の写本によれば、「五月廿九日」の日付

の後に、別筆にて「同六月廿七日到來」「建長八年六月廿七日註之」と、善鸞が自ら、書簡を受け取った日と註記した日を認めている。（『影印 高田古典』三・六四頁）

- ③ 「いかにいわんや、往生極樂の大事をいまいまどわして、ひたち・しもづけの念仏者をまどわし、おやにそらごとをいいつけたること、こ、ろうきことなり。第十八の本願をば、しほめるはなにとえて、人ごとに、みなすてまいらせたりときこゆること、まことにほうほうのつみが、又五逆のつみをこのみて、人をそんじまどわさる、こと、かなしきことなり。ことに破僧の罪ともうすつみは、五逆のその一なり。親鸞にそらごとをもうしつけたるは、ち、をころすなり、五逆のその一なり。」（『定親全』三・書簡篇・四二―四三頁）
- ④ 「まづ慈信がもうしそろう法文の様名目をもきかず、いわんやならいたることもそららはねば、慈信ひそかにおしうべき様もそらわらず。またよるもひるも慈信一人に、人にはかくして法文おしえたることそらわらず。もしこのこと慈信にもうしなから、そらごとをもうしかくして、人にもしらせずしておしえたることそららは、三宝を本として、三界の諸天・善神、四海の龍神八部、閻魔王界の神祇冥道の罰を親鸞が身にことごとくかふりそろうべし。自今已後は慈信におきては子の儀おもいきりてそろうなり。」（『定親全』三・書簡篇・一六九頁）

- ⑤ 「念仏往生というは、阿弥陀の名号をとなえて往生をねがうなり。これは、かの仏の本願に順ずるがゆえに、正定の業となづく。ひとえに弥陀の願力にひかる、がゆえに、

他力の往生となくく。」「〔定親全〕六・写伝篇二・四二頁)

⑥ 『如来二種回向文』は、上宮寺蔵の写本の奥書に、「康元丙辰十一月廿九日愚禿親鸞八十四歳書之」とある。この年は『浄土三経往生文類』の略本と広本が著される間の年である。また略本から広本にかけて、大経往生について書き加えられている。広本では往相回向と還相回向によって大経往生が語られるのに対し、略本は二種回向の言葉さえ見られない。特に還相回向においては、全て広本で新たに書き足されている。一見しても、二種回向についての修正がなされていることが分かるだろう。また、『如来二種回向文』では、往相回向について真実の行・信・証を述べ、『教行信証』とは異なり、証から独立させて還相回向を確かめている。これは広本の大経往生と同じ回向の構造である。

⑦ 三木彰円によれば、『楽邦文類』は、既に述べたように、浄土教に関連する諸文の集成である。そこには「経」「呪」「論」から「偈」「頌」「詩」「詞」に至る一四の科が立てられ、その科に従って諸文が分類されている。その全体を概観するならば、それぞれの科に従って、明瞭に「類」がなされていることを看取できる。しかし、再往それらの「類」された諸文を見ていくとき、そこに注意しなければならないのは、「類」され包蔵された一文と一文との関係である。すなわち『楽邦文類』における一々の文とは、前後の文と文とが脈絡づけられるという態のものではない。あくまでもそれらは形式という視点から「類」された文としてそこに置かれるものであり、それゆえに「類」

された一文一文のおのが、それぞれに独立したものであると集成されたものであると言わなければならない。」「

〔真宗研究〕四七・六三～六四頁」と指摘される。

⑧ 「教卷」では、經典のみの引用となる。「無量寿経連義述文賛」は、『大経』の意義を明らかにするための読み替えが大幅になされていることから、通常引用される釈文とは意味を異にすると考えられる。従って「教卷」は、經典のみの引用で言い尽くされており、「文類」の特徴が、より顕著に見られるであろう。

⑨ 「浄土論」に曰く、云何が回向したまえる。一切苦惱の衆生を捨てずして、心に常に作願すらく、回向を首として大悲心を成就することを得たまえるがゆえにとのたまえり。回向に二種の相あり。一には往相、二には還相なり。往相は、己が功德を以て一切衆生に回施したまいて、作願して共に彼の阿弥陀如来の安楽浄土に往生せしめたまうなり。還相は、彼の土に生じ已りて、奢摩他毘婆舍那方便力成就することを得て、生死の稠林に回入して、一切衆生を教化して、共に仏道に向かえしめたまうなり。若しは往、若しは還、皆衆生を抜きて生死海を渡せんがためにとのたまえり。是の故に回向為首得成就大悲心故と言えりと。已上(『定親全』一・二二八～二二九頁)

⑩ この浄入願心は「証卷」にも引用されるが、そこには『論』に曰く「の語は見られない。『定親全』一・二〇九頁を参照。

⑪ 『定親全』一・二八三～二八四頁

⑫ 『摧邪論』には、「菩提と言うは、即ち是れ仏果の一切

智智、心と言うは、此の一切智智に於いて希求の心を起す。此れを指して菩提心と云う。一切の仏法、皆此の心に依りて生起するを得。此の希求の心、初後の位に隨いて、浅深の不同あり。其の不同を言うに、亦多種あり。今且く一説に依るに、華嚴の表公、四発心を出す。(中略)今善導の意に依るに、浄土の家に於いては、縁発心を取るべし。何とならば九品の人を出すに諸師の大小の位次に配するを破して、唯一向に凡夫を取る。先ず上品上生の人を判じて云く、「正しくは是れ仏世を去りて後の大乘極善上品の凡夫」と云々。以下の八品は倍す此れよりも劣れり。上品既に次位を配せず。然るに「道俗時衆等各発無上心」等と云いて、菩提心を以て往生の正因と為すが故に。明らかに知んぬ、四発心の中に縁発心を取るなり。」(鎌倉旧仏教』五二〜五三頁)と述べられる。このように明恵は、規定された仏道体系の中で、その階梯に基づいて菩提心を定義し、衆生の機根を問題としていない。この定義に続いて、『往生要集』からの孫引きとして、『安樂集』に引用される『浄土論註』の善巧撰化章を引くが、「若し人無上菩提心を発せずして、但彼の国土の樂を受くること間なきを聞きて、樂の爲の故に生を願するは亦当に往生を得ざるなり。」(『真聖全』一・三三九頁)以降を引用しては明らかなことからも、衆生の機が問題にされていないことは明らかである。

⑬ 「しかれば南無の言は帰命なり。(中略)是を以て帰命は本願招喚の勅命なり。」(『定親全』一・四八頁)

⑭ 「明らかに知りぬ。是れ凡聖自力の行にあらず。故に不

回向の行と名づくるなり。」(『定親全』一・六七頁)
⑮ 「行巻」では「選択本願の行信」と言われ、『歎異抄』においても「念仏もうさんとおもいたつこゝろ」と伝えられているように、親鸞は行信不離であることを徹底している。それは三心一心の間答においても、至心釈において「至徳の尊号を其の体とせるなり」(『定親全』一・一一七頁)と言われることからも明らかである。

⑯ 『歎異抄』第二章 『定親全』四・言行篇一・六頁